初春

IMS 百人一首の会

日本人のお正月の楽しみ、百人一首。千年にも渡って親しまれる百首の名歌を昔に倣い節付けをして声に出し、雅な響きを謡い合い、年の初めの和事を楽しみましょう。

その一 「節付き詠み会」

百人一首は、五、七、五、七、七、の音で出来ています。かるた取りで聞き慣れたメロディーを、古来の音階にのせ直し、新しい節付（簡単な作曲）を習います。その曲の、声の出し方、流し方などをお稽古します。

《お抹茶とお菓子で休憩》

その二 「かるた取り会」

詠み手と取り手に分かれてのかるた取り。交替で詠み手をつとめます。詠み手はもちろん節付きで詠みましょう。

日時　平成二十四年一月二十一日（土）
　　午後一時から午後五時まで

会場　仙台市青年文化センター　和室1

受講料　三千五百円

講師　磯貝　靖洋

○服装は洋服でも結構ですが、当日は更衣室を用意しておりますので、和服で初春気分を味わってみてはいかがでしょうか。

秋の田の　かりほの庵の　苫をあらみ　わが衣手は　露にぬれつつ　天智天皇
春すぎて　夏来にけらし　白妙の　衣ほすてふ　天の香具山　持統天皇
あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　ながながし夜を　ひとりかも寝む　柿本人麻呂
田子の浦に　うち出でてみれば　白妙の　富士のたかねに　雪は降りつつ　山部赤人
奥山に　紅葉踏み分け　鳴く鹿の　声聞くときぞ　秋は悲しき　猿丸大夫
鵲の　渡せる橋に　置く霜の　白きを見れば　夜ぞふけにける　中納言家持
天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも　安倍仲麿
わが庵は　都のたつみ　しかぞすむ　世をうぢ山と　人はいふなり　喜撰法師
花の色は　移りにけりな　いたづらに　我身世にふる　ながめせしまに　小野小町
たちわかれ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとし聞かば　今帰り来む　蟬丸
わたの原　八十島かけて　漕ぎ出でぬと　人には告げよ　あまのつりぶね　参議篁
天つ風　雲のかよひ路　吹きとぢよ　乙女の姿　しばしとどめむ　僧正遍昭
筑波嶺の　みねより落つる　みなの川　恋ぞつもりて　淵となりぬる　陽成院
陸奥の　しのぶもぢずり　誰ゆゑに　乱れそめにし　我ならなくに　河原左大臣
君がため　春の野にいでて　若菜摘む　わが衣手に　雪は降りつつ　光孝天皇
立ち別れ　いなばの山の　峰に生ふる　まつとし聞かば　今帰り来む　中納言行平
ちはやぶる　神代もきかず　竜田川　からくれなるに　水くくるとは　在原業平朝臣
住の江の　岸に寄る波　よるさへや　夢のかよひ路　人目よくらむ　藤原敏行朝臣
難波潟　短かき蘆の　節の間も　逢はでこの世を　過ぐしてよとや　伊勢
わびぬれば　今はた同じ　難波なる　身をつくしても　逢はむとぞ思ふ　元良親王
今来むと　いひしばかりに　長月の　有明の月を　待ち出でつるかな　素性法師
吹くからに　秋の草木の　しをるれば　むべ山風を　あらしといふらむ　文屋康秀
月見れば　ちぢに物こそ　悲しけれ　わが身ひとつの　秋にはあらねど　大江千里
このたびは　ぬさもとりあへず　手向山　紅葉のにしき　神のまにまに　菅家
名にし負はば　逢坂山の　さねかづら　人に知られで　くるよしもがな　三条右大臣
小倉山　峰の紅葉ば　心あらば　今ひとたびの　みゆき待たなむ　貞信公
みかの原　わきて流るる　いづみ川　いつ見きとてか　恋しかるらむ　中納言兼輔
山里は　冬ぞさびしさ　まさりける　人目も草も　かれぬと思へば　源宗于朝臣
心あてに　折らばや折らむ　初霜の　置きまどはせる　白菊の花　凡河内躬恒
有明の　つれなく見えし　別れより　暁ばかり　憂きものはなし　壬生忠岑
朝ぼらけ　有明の月と　見るまでに　吉野の里に　降れる白雪　坂上是則
山川に　風のかけたる　しがらみは　流れもあへぬ　紅葉なりけり　春道列樹
久方の　光のどけき　春の日に　しづ心なく　花の散るらむ　紀友則
誰をかも　知る人にせむ　高砂の　松も昔の　友ならなくに　藤原興風
人はいさ　心も知らず　ふるさとは　花ぞ昔の　香にほひける　紀貫之
夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを　雲のいづこに　月宿るらむ　清原深養父
白露に　風の吹きしく　秋の野は　つらぬきとめぬ　玉ぞ散りける　文屋朝康
忘らるる　身をば思はず　誓ひてし　人の命の　惜しくもあるかな　右近
浅茅生の　小野の篠原　しのぶれど　あまりてなどか　人の恋しき　参議等
忍ぶれど　色に出でにけり　わが恋は　物や思ふと　人の問ふまで　平兼盛
恋すてふ　わが名はまだき　立ちにけり　人知れずこそ　思ひそめしか　壬生忠見
契りきな　かたみに袖を　しぼりつつ　末の松山　波こさじとは　清原元輔
逢ひ見ての　後の心に　くらぶれば　昔は物を　思はざりけり　権中納言敦忠
逢ふことの　絶えてしなくば　なかなかに　人をも身をも　恨みざらまし　中納言朝忠
衣ほすと　いふべき人は　思ほえで　身のいたづらに　なりぬべきかな　謙徳公
由良の門を　渡る舟人　かぢを絶え　ゆくへも知らぬ　恋の道かな　曽禰好忠
八重むぐら　しげれる宿の　さびしきに　人こそ見えね　秋は来にけり　恵慶法師
風をいたみ　岩うつ波の　おのれのみ　くだけて物を　思ふころかな　源重之
みかきもり　衛士のたく火の　夜はもえ　昼は消えつつ　物をこそ思へ　大中臣能宣朝臣
君がため　惜しからざりし　命さへ　長くもがなと　思ひけるかな　藤原義孝

かくとだに　えやはいぶきの　さしも草　さしもしらじな　もゆる思ひを　藤原実方朝臣
明けぬれば　暮るるものとは　知りながら　なほうらめしき　朝ぼらけかな　藤原道信朝臣
嘆きつつ　ひとりぬる夜の　あくるまは　いかに久しき　ものとかはしる　右大将道綱母
忘れじの　ゆく末までは　かたければ　今日を限りの　命ともがな　儀同三司母
滝の音は　たえて久しく　なりぬれど　名こそ流れて　なほ聞えけれ　大納言公任
あらざらむ　この世のほかの　思ひ出に　いまひとたびの　あふこともがな　和泉式部
めぐりあひて　見しやそれとも　わかぬまに　雲がくれにし　夜半の月かな　紫式部
有馬山　猪名の笹原　風吹けば　いでそよ人を　忘れやはする　大弐三位
やすらはで　寝なましものを　さ夜ふけて　かたぶくまでの　月を見しかな　赤染衛門
大江山　いく野の道の　遠ければ　まだふみも見ず　天の橋立　小式部内侍
いにしへの　奈良の都の　八重桜　けふ九重に　にほひぬるかな　伊勢大輔
夜をこめて　鳥のそらねは　はかるとも　よに逢坂の　関はゆるさじ　清少納言
いまはただ　思ひ絶えなむ　とばかりを　人づてならで　言ふよしもがな　左京大夫道雅
朝ぼらけ　宇治の川霧　たえだえに　あらはれわたる　瀬々の網代木　権中納言定頼
うらみわび　ほさぬ袖だに　あるものを　恋にくちなむ　名こそをしけれ　相模
もろともに　あはれと思へ　山桜　花よりほかに　知る人もなし　前大僧正行尊
春の夜の　夢ばかりなる　手枕に　かひなくたたむ　名こそをしけれ　周防内侍
心にも　あらでうき世に　ながらへば　恋しかるべき　夜半の月かな　三条院
あらし吹く　三室の山の　もみぢばは　竜田の川の　錦なりけり　能因法師
さびしさに　宿を立ち出でて　ながむれば　いづこもおなじ　秋の夕ぐれ　良選法師
夕されば　門田の稲葉　おとづれて　蘆のまろやに　秋風ぞ吹く　大納言経信
音に聞く　高師の浜の　あだ波は　かけじや袖の　ぬれもこそすれ　祐子内親王家紀伊
高砂の　をのへの桜　さきにけり　富山のかすみ　たちずもあらなむ　前権中納言匡房
憂かりける　人を初瀬の　山おろしよ　はげしかれとは　祈らぬものを　源俊頼朝臣
契りおきし　させもが露を　いのちにて　あはれ今年の　秋もいぬめり　藤原基俊
わたの原　こぎいでてみれば　久方の　雲いにまがふ　沖つ白波　法性寺入道前関白太政大臣
瀬を早み　岩にせかるる　滝川の　われても末に　あはむとぞ思ふ　崇徳院
淡路島　かよふ千鳥の　なく声に　幾夜ねざめぬ　須磨の関守　源兼昌
秋風に　たなびく雲の　たえ間より　もれいづる月の　影のさやけさ　左京大夫顕輔
長からむ　心もしらず　黒髪の　乱れてけさは　ものをこそ思へ　待賢門院堀河
ほとときす　鳴きつる方を　ながむれば　ただ有明の　月ぞ残れる　後徳大寺左大臣
思ひわび　さてもいのちは　あるものを　憂きにたへぬは　涙なりけり　道因法師
世の中よ　道こそなけれ　思ひ入る　山の奥にも　鹿ぞ鳴くなる　皇太后宮大夫俊成
ながらへば　またこの頃や　しのばれむ　憂しと見し世ぞ　今は恋しき　藤原清輔朝臣
夜もすがら　物思ふころは　明けやらで　閨のひまさへ　つれなかりけり　俊恵法師
なげけとて　月やは物を　思はする　かこち顔なる　わが涙かな　西行法師
村雨の　露もまだひぬ　まきの葉に　霧たちのぼる　秋の夕ぐれ　寂蓮法師
難波江の　蘆のかりねの　一夜ゆえ　みをつくしてや　恋ひわたるべき　皇嘉門院別当
玉の緒よ　たえなばたえね　ながらへば　忍ぶることの　弱りもぞする　式子内親王
見せばやな　雄島のあまの　袖だにも　ぬれにぞぬれし　色はかはらず　殷富門院大輔
きりぎりす　鳴くや霜夜の　さむしろに　衣かたしき　ひとりかも寝む　後京極摂政前太政大臣
わが袖は　潮干にみえぬ　沖の石の　人こそしらね　かわくまもなし　二条院讃岐
世の中は　つねにもがもな　渚こぐ　あまの小舟の　綱手かなしも　鎌倉右大臣
み吉野の　山の秋風　さ夜ふけて　ふるさと寒く　衣うつなり　参議雅経
おほけなく　うき世の民に　おほふかな　わがたつ杣に　墨染の袖　前大僧正慈円
花さそふ　嵐の庭の　雪ならで　ふりゆくものは　わが身なりけり　入道前太政大臣
こぬ人を　まつほの浦の　夕なぎに　焼くやもしほの　身もこがれつつ　権中納言定家
風をよぐ　ならの小川の　夕ぐれは　みそぎぞ夏の　しるしなりける　従二位家隆
人もをし　人もうらめし　あぢきなく　世を思ふゆえに　物思ふ身は　後鳥羽院
ももしきや　ふるき軒ばの　しのぶにも　なほあまりある　昔なりけり　順徳院

講師：磯貝靖洋
Vocal Arts Service Center（VASC）代表　磯貝メソッド主宰
（音声言語指導者　音声学研究者　発声・構音指導者　舞台演出家　音楽指導者）
三〇年以前より舞台表現者の発声法、構音・発話法の研究を続け、俳優、声優、声楽家、ミュージカル俳優、朗読俳優の音声・表現指導にあたる。手がけたアーティストは5千名を超え、豊かな体験から創案された「磯貝メソッド」は高いレベルで高評。指導は社会教育に広がり、一般社会人の発声・呼吸法、伝わる話し方、企業社会人のコミュニケーション発声、発話法をはじめ教育現場の声とことば法等、幅広く展開。磯貝メソッド創造塾(東京)で通年指導のかたわら、札幌、仙台、新潟、金沢、広島等でもワークショップにて指導。障害者、高齢者の音声指導、外国人の音声芸術表現指導も行う。

■お申込み方法
申込用紙に御記入の上、FAXにてお願い致します。
また、電話・メールでのお申込みも承ります。

■お申し込み・お問い合せ

IMS磯貝メソッド仙台塾
〒九八〇-〇八六六　仙台市青葉区三十人町四-二
TEL　〇九〇-二八四六-三七六四
FAX　〇二二-三九九-七九五五
E-Mail:sendai.juku@softbank.ne.jp

受講申込書

氏名（ふりがな）：　　【男・女】　年齢：　才
住所：〒　　－
職業：
電話：（　　）　　（　　）
Eメール：　　FAX：　　㊞